

# ア系指示詞と聞き手の知識

前田 昭彦

キーワード：指示詞、現場指示、文脈指示、回想、内言、

## 1. はじめに

日本語教育において、指示詞<sup>1)</sup>の指導は通常、現場指示の用法からなされる。ア系指示詞も対象が話し手・聞き手の共通の視界にある状況で教えられる。これは、現場指示においてア系指示詞が話し手、聞き手の対象に対する共通知識のもとに使用されることを教えていることになる。しかし、その意図が察知できる学習者がどれほどいるであろうか。あるいはまた、そのような教授法をとっている教師のほうにも、ア系の現場指示に対象に対する共通知識が必要であることを自覚して教えている人がどれほどいるであろうか。

このような疑いを抱くのも、指示対象が両者の視界にない場合についてほとんど指導がなされていないからである。学習者はそのとき母語を基準に類推する以外に方法がない。日本語母語話者であれば、対象が遠くにあつて視界にない場合に、ア系指示詞を使用する人はいないと考えられるが、中級、上級の日本語学習者の中には、そのような場合にアが使用できると考えている人が意外に多い。その根拠を尋ねてみると、ほとんど母語の指示詞がそうだからと答える。

現場指示のア系指示詞は、指示対象が話し手、聞き手の視界に存在するという条件下で使用されることに異を唱える母語話者はいないであろう。では、言語による情報、すなわち、文脈指示用法の場合はどうであろうか。筆者は現場指示と文脈指示の用法に矛盾はないという立場であるが<sup>2)</sup>、最近の指示詞に関する文献を読むと、文脈指示におけるア系指示詞の使用には聞き手の知識を必要としないという見解が支持され、定説化されそうな勢いである。

本稿はア系指示詞の文脈指示における用法、とりわけ聞き手の指示対象に対する知識について再検討するものである。その際、情報の発信者には書き手を含めて「話し手」、受信者には読み手を含めて「聞き手」という用語を使用する。例文の文頭、文中の記号\*は不適格、?は不適格とは言えないまでも自然さ

に疑問があるという意味で使用する。

## 2. 現場指示、内言、独り言におけるア系指示詞

### 2. 1. 現場指示における特殊なア系指示詞

指示対象が話し手、聞き手、両者の視界にあるとき、それが両者から遠いという意識があれば指示詞はアが使用される。アを使用するか否かを決定するのは、いうまでもなく話し手である。この時、指示対象に対して聞き手の認識が必要なこと、遠い、近いの距離が物理的な実測距離ではなく、心理的な距離であることは少なくとも日本語教育の分野では常識である。ただし、ア系指示詞とコ系指示詞の物理的距離の逆転が起こりうることはさほど知られていない。加藤（2001）を引用した前田（2003）でこれに言及したところ、お読みいただいた何人かの人から、間違いではないかというご指摘があった。ほとんどが日本語教育関係、英語教育関係の方々であった。重複することになるが、さらに同種の例をあげてみることにする。

- (1) 三階にある部屋の住人と訪問客が、その部屋の窓際にいる。そこから100メートルほど離れたところに20階建ての大きな建物が見える。その手前の広場に何本かのさほど大きくない樹木がある。客が尋ねる。

「コノ建物は何ですか。」

「コレは最近できたマンションです。」

「アノ木は何という木ですか。」

「アレですか。アレはナンキンハゼです。秋には紅葉がきれいですよ。」

上記(1)のような会話が実際に行われるのである。ここでは物理的な距離において遠いほうにコが、近い方にアが使用されていて、通常の指示詞の用法とは距離が逆転している。しかし、大きい物が近くに見え、小さいものが遠くに見えるという人の心理的・主観的な距離感においては何ら逆転はない。

また、山頂から眼下に広がる長崎の市街を見て、「コレが長崎の町です。」といい、そこに含まれる一画を指して、「アノ辺りに県庁があります。」とも言う。コの中にアが含まれるわけである。このように遠近はあくまでも心理的、主観的なものであり、そこでは物理的な距離は問題にならない。

上の遠近を問題にした2例においても指示対象は話し手、聞き手の視界内に

ある。このように指示対象が両者に認知されることがア系指示詞の直示（／現場指示）用法における前提である。ところが、例外的に指示対象が聞き手の視界内に存在しなくてもアが使用される場合がある。

- (2) 夫が縁側に立って、外を見ている。庭には植木鉢がある。かなり遠くには木々が見える。妻は障子を隔てた室内にいる。夫が妻に話し掛ける。

「コレは何だい。」

「コレって？」

「植木鉢から芽を出しかけているやつだよ。」

「ああ、それね。それは先日買ってきたチューリップよ。」

「そうかい。それにしても、今日は風が強いな。アソコの木がアンナに揺れてるよ。」

「そう。そんなに風が強いんだったら、春一番かもしれないわね。」

(2)の指示対象は聞き手である妻の視界にはない。話し手である夫は単に自己からの距離と風の強さの程度を示すためにコやアを使っているにすぎない。夫は妻が距離や程度を推測することを期待しているのである。これはアにおける特殊な現場指示用法で、後述する内言、独り言におけるア、さらに文脈指示における回想のアと繋がりをもつものと考えられる。

## 2. 2. 独り言、内言におけるア系指示詞

### 2. 2. 1. 独り言、内言の現場指示とソ

独り言というのは聞き手を想定しない状況で、言語化された思いや考えを呟きなどの形で音声化したものである。内言は思いや考えが言語化されてはいるが、音声化などによる表出を伴わない。自問自答のように、当人の中に尋ねる自己と答える自己といった、聞き手と話し手を設定することができるが、そのような場面はここでは除外して考える。

独り言、内言の現場指示ではコとアは出現するが、ソは出現しない。ただし、「どこかソノ辺り」などのソのように、「不定な近く」に意味が変容したソはこの限りではない。このように、独り言、内言の現場指示において基本的にソ系が使用されないことは、現場指示において、聞き手の登場をまって初めてソという概念が構成されることの傍証ともなる。

ところが、黒田成幸（1979）には独り言にもソが出現するとして、概略以下のような例があげられている。

遠隔の地に住む知人が不慮の死をとげた。その後、聞くところによるとその知人は方程式論に密かな思いをめぐらし、新奇な着想を得ていたと言う。今や誰一人その内容を知る人はいない。たまたまその知人のことが偲ばれ、「もしせめてその概要が発表されていたら学会の状況は一変していたのではないだろうか」と知人の死を悼む。

以上が概要であるが、黒田では下線部が現場指示用法のソとされている。はたしてそうであろうか。「聞くところによると」という前置きが暗示するように、ここで使用されたソは五感によって感知される対象を指示しているのではなく、むしろ言語に基盤を持つ文脈指示のソと考えるべきではあるまいか。ソレの指示対象は「新奇な着想を得ていたという方程式論」と捉えるのが自然ではないだろうか。

金水 敏（1999）は直示、すなわち現場指示を「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである。」と定義している。このような捉え方で見ると、黒田におけるソは「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象」ではなく、「聞くところによって」言語的に構築された「密かに思いをめぐらし、新奇な着想を得ていたという知人の方程式論」である。外部の世界に実体として存在している「方程式論」そのものを指しているわけではない。

黒田（前掲）ではさらに、自分の心の中にあることを自分で「それ」と言うことも、状況によっては不可能ではないと述べ、次の例をあげている。

何かを執筆することを頼まれて、それに応じようか応じまいかと迷っていたとする。その時あることが心に浮かんで、「うん、まあ、そのことでも書いてみるか」と考える。（中略）先ず、ある事柄が心の中にあるが、未だそれが果たしてどのような事であるかよくは分らない。しかし、その題目がどのように発展するかは確かでないにしても、そのことについて書いてみることにして少し考えてみれば、考えも纏まって来るであろうといった場合には、「そのことでも書いてみようか」ということになり（後略）

この場合のソもやはり言葉によって構築されかけた概念であり、言語外にあ

らかじめ存在する対象ではない。「心に浮かんだ」ものが、例えば「指示詞がおもしろそうだ」というのであれば、「そのこと」が指すのは言語によって構築された「指示詞がおもしろそうだということ」あるいは「おもしろそうな指示詞の問題」である。これは概念であり、実体ではない。現場指示というよりは、文脈指示というべきであろう。もし、書きたいと思う対象が言語を伴わないイメージだけであれば、おそらく「これについて書いてみよう」とコが使われると思われる。

このように独り言、内言における現場指示には「近く」という意味に変容した「ソノ辺り、ソノ辺、ソコラ」などを除きソ系指示詞の使用は控えられる。

### 2. 2. 2. 独り言、内言における文脈指示とア

独り言、内言における文脈指示においてコ、ソ、ア総てが使用されることは説明の要はないと思われるが、いくつかの問題があるので、そのなかの主としてアについて考察する。なお、例文は断りが無い限り、独り言または内言のものである。

(1) 来週はテストが12もあるのか。コレ/\*ソレ/\*アレは大変だ。

(1)で指示詞が担っているのは、言語によってもたらされた事態、すなわち「来週テストが12あること」であり、あらかじめ言語外に存在する実体ではない。換言すると、現場指示ではなく、文脈指示である。ここでアが使えないのは、未経験の将来に関する事態であるからと考えられる。ソでは客観的な他人事となり、ただ今、現在の切迫感が表わせない。自己に差し迫った非常事態をコが表現しているわけである。

(2) 先々週はテストが12もあったなあ。\*コレ/\*ソレ/アレは大変だったなあ。

(2)の先々週のテストはもはや身近な事態でもなく、差し迫った事柄でもない。コは不適格である。ソではやはり客観的に過ぎ、他人事である。もっともソレハソレハと、程度を表わす語句の片割であるソレハであれば(2)で使用可能となるが、それはここでの考察の対象外である。自己の大変な経験の回想としてはアしか使えない。独り言、内言のアはたとえそれが言語によって構築されたも

のであっても、過去の直接体験の回想に最も相応しいといえよう。

(3) 山田は来週テストが12あるそうだが、\*コレ/ソレ/\*アレは大変だろうなあ。

(4) 山田は先週テストが12あったそうだが、\*コレ/ソレ/\*アレは大変だったろうなあ。

(3)における事態は私に関わるものではない。大いに同情はするが私に身近な事態に使用するコは使えない。また、指示対象は未来の事態であり、私の直接体験の回想ではないので、アも使えない。言語によって構築された他者の事態を指示するのはソである。

(4)においてコが不適格な理由は(3)と同様である。(4)は過去の事態ではあるが、私の体験の回想でもないので、アは使用できず、客観的なソが適格となる。言うまでもないが、ここでは指示詞が山田を指している場合は問題としていない。このように、独り言、内言のアは、話し手の過去における直接体験を回想的に述べるときに最も相応しいと考えられる。

(5) 政府は消費税率をまた上げると言っているようだが、コンナ/ソンナ/\*アンナことを繰り返していたら、社会的弱者の生活は苦しくなる一方だ。

(6) アメリカ政府は自国の産物輸入を妨げる他国の保護貿易的関税を総て撤廃させると言っているが、コンナ/ソンナ/\*アンナことをするのなら、自国の産業を保護する貿易施策も総て撤廃すべきだ。

(5)も(6)もコの使用は自己に身近で、自己に引き付けて考えている印象を与える。ソではやや突き放した、客観的な印象がある。アが使えないのは、内容がまだ実現されていない未来のことだからと考えられる。(5)を「政府は昨年消費税率をまた上げた」とし、(6)を「保護貿易的関税を3年前に総て撤廃させた」と過去の事実を表わす文に変えると、コンナ、ソンナに加えて、アンナが使えるようになる。アンナは直接体験の回想だけでなく、過去の良く知っている事実の指示にも使用される。

(7) ほっぺたが落ちそうだ。コンナ/\*ソナ/\*アンナ美味しいものは今まで食べたことがない。

(8) 友達にもらった果物を食べたとき、ほっぺたが落ちそうだった。\*コンナ/\*ソナ/アンナ美味しいものは初めてだった。

(7)でソが使えないのは、言葉で構築された概念ではなく、実際の感覚を指しているからであろう。また、現時点の発話なのでアも使えない。(8)でコではなくアが使用されるのは過去の実体験の回想だからと考えられ、ソの不使用の理由は(7)の場合と同じである。実体験の回想でない次のような例ではアの使用ができなくなる。

(9) 非常に美味しいものに頬落という言葉を使うらしい。私は\*コンナ/ソナ/\*アンナ美味しいものを食べたことがない。

(9)でソを使うのは指示対象が実体ではなく、言葉によって構築された概念からである。したがってアは不適格となる。アは概念の指示には使いづらいと言える。

これまで未来における文脈指示にア系指示詞が使用されないことを述べてきたが、それが妥当であるかどうか、いま少し検証してみよう。

(10) 来年イタリアへ旅行する予定だが、\*コノ/ソノ/\*アノときはワインを友人への土産に買おう。

(11) 来年イタリアへ旅行する予定だが、\*ココ/?ソコ/アソコではワインを友人への土産に買おう。

(10)で見ると確かに未来とアは共起できないといえる。これを過去に変えて、「去年イタリアへ旅行した。アノときはワインを友人へのみやげに買ったのだった」とすればアが使用可能になる。(11)は未来の文にアが使用されているが、アの指示対象はイタリアという実体であり、これは文脈指示というべきものではなく、むしろ現場指示用法である。

これまで指示対象が指示詞の前方にある前方照応について見てきたが、対象が後に来る後方照応についてはどうであろうか。

- (12) 先週山田に会ったとき、コウ/\*ソウ/アア言えばよかった。もうおまえと会うことはないだろうと。
- (13) 先週山田に会ったとき、あいつが本当に言いたかったのはコウ/\*ソウ/アアだったんだな。もう俺には会いたくないということだったんだな。

上の2例ではいずれもコウは適格であるが、アアも不適格とはいえない。アアが使えるのは、まず過去に関することだからであろう。(12)では先週山田と会っている場面が想像され、想像された過去の場面の中で、そのとき言うべきであった言葉「もうおまえと会うことはない」がアアによって先行されていると考えられる。あのとき言うべきであった言葉、「もうおまえと会うことはない」は現時点で考えられているのであるが、アの作用によって、時を隔てた先週という過去の中へと送り込まれたのである。コウであれば、山田と会った場面は過去であっても、コウの内容である言うべき言葉は、今、現在考えられているのだということを表わすことになる。(13)のコとアは、先週会った時の山田の気持ちを忖度して、そうなるはずの山田の発話を表わすのであるが、それぞれの機能は(12)の場合と同じである。

ここで留意すべきことはコウであれ、アアであれ、それを使った時点で「もうおまえと会うことはないだろう」といった指示対象である言葉は脳の中には既に存在している、あるいは存在しかけていることである。コを使用すればそれが今、現在考えていることになり、アを使用すればあたかも過去の場面で言われてしかるべきだった言葉が思考している当人には疾うに分っていて、その言葉を含めた全体が時間の隔たりをもった過去の世界の出来事であるかのような印象を与える作用をもつ。このような現在と過去を結び付けるアの機能は、「アア、今分った」「アア、そうか(／そうだった)」などにおける感嘆詞(／感動詞)のアアとも繋がりをもつと考えられるが、ここではそこまでは踏み込まない<sup>3)</sup>。

上の(12)(13)では実際には発話されなかった言葉の後方照応について検討した。では、実際に発話された場合はどうであろうか。



- (14) 先週山田に会ったとき、俺はあいつにコウ/\*ソウ/アア言ったんだった。  
「もうおまえには会いたくない」と。

(12)(13)のアに多少とも違和感を覚える人も、(14)のアの自然さに異存はないであろう。後方照応においても過去の直接体験の回想にはアが最適なのである。コを使うと、過去を現在に引き寄せて述べている印象を与えることになる。

では、未来における後方照応にア系指示詞が使用できるだろうか。

- (15) 来週山田に会ったらコウ/\*ソウ/\*アア言おう。「おまえにはもう二度と会う気はない」と。

- (16) 今度京都へ行ったら、\*ココ/\*ソコ/アソコへ行こう。一休和尚ゆかりの大徳寺へ。

ともに未来の文であるのに、(15)ではアが不適格で、(16)では適格になるのはなぜだろうか。それは金水（前掲）流に言えば、(16)におけるアの指示対象「大徳寺」が言語による情報以前に外界に既に存在している実体だからである。(11)の「イタリア」同様、「大徳寺」もまた現場指示と言えるものである。このように未来の文では一見文脈指示のようであっても、実は現場指示のアであることが多い。このようなことを勘案すると、文脈指示におけるア系指示詞はかなり現場指示の用法に近いとも考えられ、事実、文脈指示のア系指示詞を現場指示用法の拡張と捉える研究者もいる<sup>4)</sup>。

これまで検討してきたところから、ア系指示詞の独り言、内言における用法をまとめると次のようになる。

- ① 過去の場合、文脈指示では直接経験、よく知っている出来事のように、概念ではなく実体的な事柄を指して、回想的に述べる場合に使用される。現場（/現物）指示、文脈指示ともに前方照応も後方照応も可能である。
- ② 未来では、現場（/現物）指示用法では前方照応、後方照応ともに可能であるが、言語によって構築された概念を指す用法、すなわち文脈指示用法としては使用できない。

### 3. 文脈指示におけるア系指示詞

#### 3. 1. ア系文脈指示の先行研究

本稿の主題は、文脈指示におけるア系指示詞の使用に、聞き手との間に指示対象に対する知識の共有を必要とするか否かという問題である。話し手は聞き手との間に対象に対する知識の共有を想定した上でア系指示詞を使用すると筆者は考えてきた。これまで日本語を教えてきて、その捉え方に齟齬を来す例に出会ったことはなかった。ところが、近年の文献を検討すると、どうやらそのような立場は少数派で、ア系指示詞の使用には聞き手の知識は不要であるという見解が大勢を占める気配があり、定説化しそうな勢いである。はたしてそれでいいのだろうか。

ア系指示詞の使用に聞き手の知識の必要性を説いたのは、堀口和吉 (1977) でも指摘されているように、早くは松下大三郎 (1924) である。松下はアレ、アチラ、アスコなどを「位地代名詞」のなかの遠称に分類し、「遠称は遠いものを指すのであるが、其れは自他共に知つて居る事物に限るのである。自他の一方が知らない事物は遠方に在つても遠称を用ゐない。」と述べ、アレが使えない例として、「私は先年倫敦で或る動物を見たが「其れ」は実に奇々怪々の姿をして居た。」など3例をあげている。また、「遠称を使ふ以上は彼我共に知つて居る事物で其の概念が元来双方の頭に存したものでなければならぬ」として、弟が兄に向かって、「兄さん、国の庭に小さい松が有つたでせう。「あれ」はまう大分大きくなつたでせうねえ。」という例文をあげている<sup>5)</sup>。

このように、ア系指示詞の使用に聞き手との知識の共有が必要なことは松下により明確に指摘されているが、一般に久野暉 (1973) がその説の代表と見なされていて、批判も専らこの久野説に対して行われている。久野ではア系指示詞およびソ系指示詞の用法が次のように記されている。

ア一列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソ一列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

ア系指示詞の使用において、聞き手の知識は不要と考える研究者の論考、例

えば金水（前掲）や堤良一（2002）では久野のこの見解は黒田（前掲）によって修正を受けたとされている。だが、実際は黒田よりわずかに早く、堀口（前掲）によって前述の松下説、久野説に対する批判が行われ、ア系指示詞に聞き手の知識は必要ではないことが主張されている。以下、三人の主張を検討することにしよう。

### 3. 2. 黒田説

黒田は聞き手が知らないこともアで示すことが出来るとして次の例をあげて説明している。

- (1) 今日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。 （黒田）

黒田自身、少し座りが悪い文と言いながら、「あの火事」の適格性は「その火事」で置き換えられないことが保障しているといった趣旨のことを述べている。比較検討している一方が不適格だから、対立する他方が正しいという論理展開の不自然はここで扱わないことにしよう。

(1)の文は聞き手に正確な情報を伝えようという文ではなく、火事の場合を話し手一人だけが呑み込んだ、いわば独り言としてかろうじて成立するものである。聞き手は独り言を聞かされているわけである。聞き手は勝手な想像の枠を出て、火事の正確な様態を知るためには、「どんな火事？」と聞き返さなければならない。そこに(1)におけるアの座りの悪さの一因がある。

他の一因は金水（前掲）で指摘されているように、語用論の問題である。「名詞＋ことだから」で因果関係を述べるときは、結果に至ることが納得できるだけの名詞の属性が聞き手に理解されていなければならない。「あの火事」ではそのような属性の理解はできない。(1)のアノは次のようにすれば、不自然の謗りは免れ得ないにしても、多少は座りがよくなる。

- (1') 今日神田で火事があったよ。折からの強風に煽られて、火の粉があちこちに飛び、またたくまに火が広がったんだよ。?アノ/アンナ/ソナ/\*ソノ火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。

(1')はアンナ、ソンナが適格である。アンナ、ソンナで初めて火事の様子が伝達されるわけである。ソンナは火事の様子を言葉によって概念化し、聞き手の領域に伝達したわけで、ここにおいて独り言的回想調から、聞き手の立場を考慮した対話へと変化する。アノ、ソノは程度、情況、属性などを伝達するためには用いない。ここでも、アノ、ソノが受けているのは「今日の神田の火事」であり、火事の様子ではない。(1)に比べて(1')のアノの不自然さが多少薄らぐのには、火事の様子の説明が入ったからであり、決してこの文中における「アノ」の功績ではない。(1')のアノは(1)のアノと何も変わっていないのである。

(1)にせよ(1')にせよ不自然なのは語用論的なもので、ここで「ことだから」を使わなければ、なにも問題はない。いくつかの表現ができようが、簡単に次のようにしてみよう。

(2) 今日神田で火事があったよ。大きい火事でね、アノ火事では人が何人も死んだと思うよ。

これは不自然な例文ではない。例文(1)の検討のために遠回りをしたが、論点は、聞き手に「今日の神田の火事」についての知識がないのになぜアが使えるのかということである。

確かに(2)の話し手は聞き手の火事に対する知識を想定も期待もしていない。今日の神田の火事に対する知識の共有もなく、聞き手の知識を想定もしていないのに、対話においてなぜアが用いられているのだろうか。独り言、内言における指示詞の検証で、過去の実体験、よく知っている事柄の叙述にはアが使用されることを見た。また、視界、視野を共有できない現場指示用法で、聞き手に対象が認識できなくとも、指示対象が話し手、聞き手から離れているというおよその距離感を示すためにアが用いられることも検証した。(2)のアはそのようなアと根底において繋がりをもつといえる。

(2)は経験の回想であり、体験談である。対話には違いないが、話し手は独白的に過去の見聞を語っているだけである。回顧談に聞き手の知識を期待する必要はない。したがって、聞き手の知識を想定していないこの発話にアが使用されても何の不思議もない。むしろ、当然である。このような回想調、独白調におけるアの用法をもって、ア使用には聞き手の知識が不要であると一般化することはできないであろう。

黒田は聞き手の知識が不要なアの例としてさらに次をあげている。

- (3) 僕は大阪では山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくと、きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ。 (黒田)

黒田の指摘のように、「あの先生」は話し手の意識内で「山田先生」を言語によって概念化したものではない。話し手はいろいろな属性を持った山田先生の実体を回想しているのである。話し手が、山田先生を「自分が大阪で教わった先生」という概念として捉えて話そうという意識があれば、「その先生」が使えるという黒田の指摘は正しい。

ここで、文の後半に注目してみよう。そこでは、「つく」との「と」により、条件と結果という因果関係が構成されている。その場合、「その先生につくと」では後件を導く正当な理由が示されないことになる。「その先生」では、「きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられる」ための根拠が何も示されないのである。「あの先生」が使用された時、聞き手は話し手が山田先生を全体像として、実体として捉えていることを知る。したがって、「ユーモラスな人柄に魅せられるだろう」という後件を導くに足る根拠、すなわち山田先生の属性が、話し手の頭の中には存在していることを聞き手が理解できるのである。

ところが、言語による概念の担い手であり、客観指向でもあるソを使った「その先生」にはそのような機能がない。ソが伝達するのは「話し手が大阪で教わった山田太郎という先生」という情報だけである。「と」の後件の前提をなす山田先生の属性をソは伝達できないのである。アであれば、先生の属性が話し手には理解されているのだと、聞き手には少なくともその程度の諒解ができる。聞き手は話し手の独り言を想像力で補いながら理解するのである。

ここで、「その先生につく」を前件とし、「ユーモラスな人柄に魅せられるだろう」を後件とした、「つく」との「と」による結合を断ち切ってみるといい。次がその例文である。これも黒田で使われたものであるが、不自然さはみごとにまで消えてしまう。

- (4) 僕は大阪では山田太郎という先生に教わったんだけど、君もその先生につくとよいよ。きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ。 (黒田)

(4)の「つくとよいよ」にも依然として接続助詞「と」が使われてはいる。だが、「～とよい／～とよい」は助言、推奨の慣用表現である。ここでは、なぜそれを勧めるか、その理由が、「きっと何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ」によって示され、全体の自然な流れが醸し出される。

黒田は(3)と(4)の比較から、ア使用時の「聞き手の知識」の必要性を斥けて、対話における照応的用法すなわち文脈指示用法においても、指示詞ソ・アの選択に真に本質的な要因は、話し手が指示詞使用の場面において、対象を概念的知識の対象として指向するか直接的知識の対象として指向するかであると説く。指示詞ソ・アの選択に関するこの指摘は独り言や内言ではまさにそのとおりである。だが、これを根拠に意志疎通を目的とした対話のような場で、ア使用に聞き手の知識は考慮の必要がないと敷衍できるのであろうか。

(3)で「あの先生」とアが使用されたのはなぜだろう。もう一度検討してみよう。(2)の解説で見たように、聞き手は話し手が「あの先生」とアを使用したことにより、この発話が回想調で始められ、話し手の意識の中に「あの先生」が総ての属性をそなえた実体として存在することを理解する。話し手は聞き手のその理解を想定した上で、それを条件として「先生につくと、何とも言えないユーモラスな人柄に魅せられるよ」と述べて矛盾がないのである。

### 3. 3. 堀口説

論文発表の順でいえば黒田（前掲）より堀口（前掲）が早いのであるが、黒田がア系指示詞の使用に聞き手の知識は不要であることに重点をおいて述べられているのに対し、堀口では指示詞全般の研究の一部としてこの点が述べられていることもあり、引用の頻度において黒田にやや劣るようである。時間の順序は逆になるが、ここで堀口説の検討に入りたい。

堀口は文脈指示を扱った論の中で、前述の松下（1924）、久野（1973）によって述べられた指示詞ア使用の前提、「指示対象に対する話し手、聞き手の共通の知識」を否定する。ア使用時の共通知識否定の根拠として、倉田百三『出家とその弟子』から次の実例を挙げている。（引用中の下線は堀口による）

唯円「今日はよく晴れて比叡山があの様にはつきりと見えます」

親鸞（坐る）「あの山には今日も沢山な修業者があるのだがな」

唯円「あなたも昔あの山に永くいらしたのですね」

親鸞「九つの時に初めて登山して、二十九の時に法然様にあの山で修業したのです」

唯円「その頃の事が思はれませうね」

親鸞「あの頃の事は忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間にまじめに一すぢに煩悶したのだからな」

堀口は「この素材の対話が続いた場合、唯円はいつまでも「ソノ頃」と言い親鸞は「アノ頃」と言い続けてもおかしくない」と述べ、文脈指示におけるア系指示詞は「話し手の一方的な認定によって用いられる」と主張する。上例最後の親鸞の発話における「アノ頃」は、「相手が実態をよく知らない対象でも、話し手は自分の一方的認定でアを用いることが可能」な実例であるとされる。

たしかにここの用例「あ頃」において、聞き手の知識は想定されていない。だからといってこのことでア系指示詞の使用に聞き手の知識を必要としないと普遍化できるのであろうか。

堀口（前掲）ではこれに先立ち、内言、独白の指示詞が扱われている。そこでの指示詞は「観念指示の用法」と名付けられ、時間空間の距離と、関心、関与の強弱の点からコソアの用法が考察されている。「観念指示」の用法は「多く内言・独白にとどまるのであるが、時として、聞き手の存在する対話・文章などの場面に用いられるのである。あるいは無意識に、あるいは故意に」と述べられ、独白の形の作品において、必ずしも聞き手に実態が理解されるという期待なしに、話し手が随意にアの領域を設定するとされている。その例として、次のようなものがあげられている。

夏中あんなに飛んでいたつばくらめの姿が（中野重治・菊の花）

恋の丸ビルあの窓辺り、…せめてあの子の思い出に、（東京行進曲）

堀口は「これらの表現においても、聞き手は指示対象の実態を理解することは不可能だけれども、話し手が遙かな対象を親しい気持ちで強烈に指示していることは伝わるのである」と述べている。まさにそのとおりである。

ア系指示詞が聞き手との共通知識を想定することなく使用できるのは、2.1. 「特殊なア系指示詞」で検討したように、現場指示において、聞き手と視界を共有していない状況で対象との遠近、程度を伝える機能として使われる場合と、

現場指示、文脈指示に関わらず、そもそも聞き手そのものが存在しない2.2.の内言・独り言での使用の場合である。内言、独り言に聞き手や読者が存在すれば、それは独白調となる。過去の内容を語れば、回想調となる。これらの状況におけるアの使用は、現場指示においては聞き手と視界を共有しない、独白調、回想調では経験を共有しないという点で共通しており、ともにア使用は聞き手の想像力に依存しているのである。堀口であげられた親鸞、唯円の対話における親鸞の「あの頃」も回想という特殊な状況があってはじめて許されるアというべきものである。

### 3. 4. 堤説

黒田（前掲）、金水（前掲）と同じ見解を持つ堤（前掲）に、「話者の直接的な経験なしに、かつ聞き手の知識にも左右されずにア系指示詞を使用することができる」として、次の2例があげられている。下線は筆者による。

(1) A：ハムナプトラ2見た？

B：いや、あの／？その映画はまだ見ていない。

(2) (ワンルームマンションに住んでいる友人を訪ねた学生)

となりのやつうるさいな。あいつ何時まで起きてるんだ？

(1)から検討しよう。まず、ア系指示詞が話者の直接的な経験に基づかなければ使えないという前提の不備はこれまでの考察から明らかであることを再確認しておきたい。アは話し手がよく知っている事柄にも使えるのである。どの程度をよく知っているというかに関する基準はない。話し手の主観である。よく知っているると当人が思えばよく知っているのである。

(1)においてこの対話の読者は、Aの藪から棒とでもいった聞き方から推して、Aが「ハムナプトラ2」という映画に対して、映画名以上の何がしかの知識を持っているだろうと推測する。また、読者は、Aはこの映画に対する知識がBにあることも知っているだろうとも考える。なぜなら、Bに知識がないと思えば、Aは、例えば、「ハムナプトラ2 という映画見た？」といった聞き方をするのが普通だからである。また、Bにもこの映画に対する知識があると思われるべきである。知識がなければ、Bは「それどんな映画？」などと聞き返すであらう。



う。Bが映画のタイトル程度しか知らないのであれば「その」を使って答えるであろう。「あの」を使ったということは、堤の想定と異なり、この映画に対するかなり豊富な知識がBにあるからこそと考えるのが普通である。Bはその映画のポスターや予告編を見たかもしれない。あるいは映画雑誌などでその映画について批評などを読んだかもしれない。この程度でAは十分使えるのである。しかも、その映画は眼前にない。質問の仕方からAはその映画を見ているとも考えられる。見ていないにしても、何らかの知識を持っていることは前述のように明らかである。知識を有するBが聞き手Aの知識を想定してAを使用したと考えると何ら不都合はない。

(1)のAについて検討してみたが、この会話を読んでもっとも普通感じられることは、AやBが属する社会でこの映画がかなり話題になっているにちがいないということである。あるいは、以前二人の間でこの映画を話題に会話が交されたであろうということである。一読して、二人にこの映画に対する知識の共有があると察せられるわけで、その意味でAの使用に違和感はない。「聞き手の知識に左右されないA」使用の例としてあげられたこの会話は堤の意図に反してそのようなことを我々読者に推測させるのである。

(2)は文脈指示ではなく、現場指示である。隣室にいたことが聴覚によって確認できる人物をAで指すことは極めて自然である。独り言としてもよく、その場にいる友人に言ってもいい。その場の友人も当然隣室の様子が分っている。このA使用についてこれ以上言を費やす必要はないと思われる。

堤では九州の一部の方言（少なくとも佐賀、長崎、福岡の話者）においては、話者が実際の経験から知った人や場所でないものについて、A系指示詞を用いることができるようだと言われ、福岡方言らしい言い回しで例文が2つ示されている。佐賀、長崎、福岡の方言は肥筑方言といわれ、共通項が多い。筆者は長崎方言の母語話者であるが、堤のこの指摘は初耳である。少なくとも筆者の知る長崎方言では、相当に有名な人や場所以外にそのような使い方はしない。

九州の特異な方言の1例として、堤では、東京が話題になった場面で、「私もあそこに行ってみたいっちゃ」という発話があげられている。だが、この状況で東京を「あそこ」で指すことは、東京以外のどこに住んでいようと、日本人であれば普通に行うことではあるまいか。

繰り返すが、Aの使用は必ずしも直接の経験だけを前提にしているのではない。久野（前掲）でも指摘されているように、世間によく知られたいわゆる有

名人を指す場合、面識がなくてもアが使用されてもよい。また、行ったことのない場所にしても、皆が知っていて当然と思われるような場所の場合もア使用は可能である。まして、ここでは「東京」が言語による概念として提出されているわけでもない。子供たちの間でディズニーランドが話題になり、子供の一人が「ぼくも一度アソコへ行ってみたい」と言うのとなんら変わらない。共通知識のアである。

これまで見たように、近年、文脈指示用法のア系指示詞に聞き手の知識は必要ではないという説が半ば定説化しようとしているが、定説として納得できるような研究はまだないと言うべきであろう。独白調、回想調における特殊ともいうべきア使用を普遍化しようとする説ばかりのようである。

#### 4. 文脈指示用法におけるア系指示詞の実際

ア系指示詞の使用に聞き手との知識の共有を想定したり、期待したりしなくてもいいとなれば、前田(1993)であげた、主に天候に関する挨拶語と化したかのような「今日はアレですね。」や、前田(2003)で類似の例をあげたが、隠語の趣を帯びた「あの人、ちょっとアレね」など、日常的に使用されるアは意味をなさなくなる。ア系指示詞は実際にどのような使い方をされているのだろうか。以下、例文の下線は総て筆者による。

- (1) 陽一とアンさんから結婚式の招待状がきた。(中略) 招待状をもらってすぐに、陽一の勤めている広告会社に電話をかけて「おめでとう。良かったな」と言った。陽一に「いい招待状だな」というと、「あれはアンが書いたのを、僕が少し直したんだよ。(後略)」 (「つたえる」『中級から学ぶ日本語』研究社)

(1)ではソレではなく、なぜアレが使われているのだろうか。もし状況から電話をかけた「私」が招待状を見ながら話していると陽一が思えば、陽一は現場指示のソレを使用すると考えられる。ここは招待状が二人の手許になく、しかも両者に知識が共有されているという意識と、陽一にとっては過去の回想という気分の下にアレが用いられていると言える。

- (2) 「全くあいつらときたら、どういふつもりなんだろう」  
「あいつらって？」

「地球人にきまってるよ。このあいだなんか、もうちょっとでぶつかりそうになってさあ。何しろ交通ルールも守らないで走り回るんだから、危なくてしょうがないよ。」  
(「宇宙との出会い」『上級で学ぶ日本語』研究社)

(2)の「あいつら」も一見すると聞き手の知識と関係なく用いられたかにみえる。しかし、聞き手に「あいつらって？」と聞き返されて、「地球人にきまってるよ」と聞き手との知識の共有を期待していたことが分る。このようにア系指示詞は知識の共有に対する想定や期待だけでも使用可能である。

(3) あのユーミンの逆のミンユー（民・由）が、政局のカギを握りそうな気配になってきた。  
(岩見隆夫「近聞遠見」毎日新聞、2003・8・9)

上は新聞コラムの書き出しで、民主党と自由党の合流に関するものである。これを読みはじめた時、筆者は一瞬とまどった。芸能界などに興味があれば理解にためらいはなかったのだろうが、筆者には冒頭のユーミンが松任谷由美という歌手の愛称であることを理解するのに僅かではあるが時間がかかった。岩見氏はこの歌手の愛称を周知として、読者との共有知識を想定しながら、冒頭から「あのユーミン」と書き出したわけである。指示対象に対する聞き手の知識を前提としなければ意味をなさない書き方である。

(4) 「颯爽」という語は、杜甫が作った。ハイあの、唐の詩人杜甫です。  
(高島俊男「お言葉ですが…」『週刊文春』2003・8・14, 21)

(4)の「あの」も言うまでもなく例文(3)と同じで、「ご存知の」とか「周知の」という意識で用いられている。

(5) 昭和十年代には「颯爽」とあいならんで大いに活躍した「潑刺」は、この疊韻の語である。(中略)

「颯爽」と「潑刺」、こういうことばが大いにはやったというのは、やはりあの時代が、こういう元気のいいことばを要求していたからでありましょう。

(高島俊男「お言葉ですが…」同上)

(5)のアノは確かに聞き手と知識を共有しているわけではなく、また、聞き手の知識を想定しているわけでもない。一見すると前出の「昭和十年代」を指す、前方照応にも見える。しかし、これは独り言、内言、独白、回想等に用いられるアと捉えたほうがいい。この種のア使用には、聞き手の存在が前提とされている以上、どこかにアの内容を特定できる仕掛けが施してある。その仕掛けがここでは「昭和十年代」である。ただし、話し手がアノによって単に時を特定しただけでなく、話し手がよく知っている当時の時代的雰囲気、時代の気分まで回想していることが読み取れる。

(6) いま、この本のなかで**ぼく**が書いたことは、読み返してみると、基本的に、あのときに書いた「ものばなれ」論と大同小異であると思う。

(梶 祐輔『広告の迷走』 宣伝会議、p.249)

(6)の「あのとき」も回想調である。アの内容が分るような引用は長すぎてできないが、4段落前に「一九七〇年代の、いつか」とあり、具体的な時が分かる仕組みになっている。ただし、この場合も話し手の当時の事情まで含めたアノトキである。

(7) 長岡からの帰路、「白鳥」の車中で（杉本鉞子『武士の娘』を一筆者注）読み、京都についたころ読みおえたが、ひさしぶりでいい小説を読んだあとの文学的感動を覚えた。

同時におもわぬ書物を発見したよろこびをも覚えた。しかしそれはつかのまだった。その年の講演旅行で河盛好蔵氏とご一緒だったが、私が「発見者」としてそれを語ると、

「ああ、あれ」

と、河盛氏はうなづかれた。その書物への十分な知識と高い評価をもっておられ、あれはすぐれています、しかしながら知られざる書物ではなく、戦前それが刊行されたときは非常に評判でした、とつけ加えられた。

(司馬遼太郎『司馬遼太郎が考えたこと』 3、新潮社、p.256)

(7)はソとアが繰り返し用いられて興味深い。最初の下線ソレは、司馬氏との関わり、いきさつをともなった杉本鉞子著『武士の娘』である。河盛氏が用い

た最初のアレは、司馬氏がいきさつとともに言語によって導入した『武士の娘』ではなく、司馬氏と知識を共有している実体としての『武士の娘』そのものである。次の「ソノ書物」は「いきさつをともなって語られた書物」という言語によって構築された概念としての『武士の娘』である。二番目のアレも最初のアレと同じく実体としての『武士の娘』そのものである。最後のソレは「司馬氏がいろいろお話なさった本」という概念としての『武士の娘』を指している。

このように対象は同じでありながら、言語世界のものとしてソを使用し、実体としてアを使用する例は珍しくない。

以上いくつかの実例を見てきたが、確かにア系指示詞が聞き手の知識を想定することなく使用されることがある。しかし、それは回想、独り言、独白の中か、そのような調子を帯びた語り口のなかでのことである。その他ではア系指示詞使用には指示対象に対する聞き手との知識の共有が想定されるか、期待されていなければならない。その想定や期待を間違えると意味不明となる。次は『悪について』という本に対する書評<sup>6)</sup>の書き出しの一節である。下線は筆者による。

- (8) この本が扱うのは、今流行のあの「極悪人たち」のことではない。著者ははじめから、彼の立場を鮮明にする。悪人正機説の変種である。極悪人より、自分の中の悪を見ようとしないう「善良な市民」のほうが悪いといたいのだ。

書評の執筆者は「あの」の後に括弧まで使って「極悪人たち」としている。ところが、最近「極悪人」が多すぎるせいか、また、筆者が時勢に疎いせいか、どの極悪人たちを指しているのか皆目検討がつかないのである。このように、回想調、独白調ではない文章のなかで期待、想定が無理な聞き手の知識を前提にアを使用すると独りよがりになり、意味不明となる。ここからもア系指示詞が基本的に聞き手との知識の共有を前提としていることが分かる。

## 5. 聞き手の知識必要説

これまで検討してきたように、ア系指示詞の使用には回想調、独白調を除き、聞き手の知識を想定することが必要であると考えられる。しかし、そのような見解をもつ研究者は現在では少数のようである。最近の研究者の動向として、文脈指示用法のア系指示詞に聞き手の知識を必要とする論は影をひそめた感が

ある。

筆者は最近のこの流れに異を唱える少数者のひとりであるが、そのような少数者の知見に、東郷雄二（2000）がある。東郷は、指示詞の用法を、現場指示、文脈指示、共有知識指示の3種に区分し、複数の領域にまたがる指示の存在にも言及する。筆者とはアプローチの方法が異なるが、前述した黒田による「あの先生」のような例に対し、「回想にふけているというニュアンスが生じる」と筆者と同じような見解に立っている。

また、迫田久美子（2004）はわずか2ページのなかに、ア系指示詞、ソ系指示詞の使い分けを的確にまとめ、その中で、「[ア]は話し手・聞き手のどちらも知っている対象に使う、という制約があります」と述べている。さらに、いくつかの例をあげた後、次のようにまとめている、

- ①聞き手の知らない対象でも、独り言や回想的な表現では「ア」が用いられる。
- ②対話において、独り言や回想的な表現が許されるのは、一般的に話し手が聞き手にとって目上や年上の場合である、と考えられる。

まことに妥当な見解ではないかと思われるが、如何だろうか。これによって、文脈指示におけるア系指示詞の使用に聞き手の知識の不要を説いた前述の堀口の例証、親鸞と唯円の対話が決してア使用の一般則になりえないことも納得できるのではないだろうか。

## 6. おわりに

近年、指示詞研究者の間では、文脈指示用法のア系指示詞の使用に聞き手の知識を考慮する必要はないとする説が大勢を占めようとしている。本稿はそのような趨勢に再考を促すものである。

まず、現場指示用法の考察において、話し手、聞き手の間で視界、視野が共有される場合、共有できない場合の用法を検討した。前者では指示対象に対する共通知識が必要とされるのに対し、後者では必ずしも対象に対する知識の共有が必要ではなく、指示詞が単に話し手ないし両者からの距離、位置関係を表わすために使用される場合があることを示した。現場指示において、対象に対する聞き手との共通知識を必須とする場合と、必ずしもそうでない場合があるという指示詞の性質は、文脈指示用法におけるア系指示詞と聞き手の知識の関

係を考察する上で非常に示唆的である。

次に、聞き手の存在を必要としない独り言、内言における指示詞の用法、特にア系指示詞の用法を検討した。そこではアが過去の直接体験や親しく知っている事柄に関して用いられ、未来との共起は困難であることが判明した。この分析から、聞き手がいる時の文脈指示用法のア系指示詞は、回想調、独白調で使用される場合においてのみ、聞き手との共有知識に対する配慮を必要としないことが分かった。その他の場合は、文脈指示のア系指示詞の使用には聞き手の知識への配慮が必要であるという結論に至った。

一般的な現場指示におけるア系指示詞が対象に対する聞き手の知識をその使用の前提としているように、文脈指示におけるア系指示詞の使用も対象に対する聞き手の知識を前提としている。現場指示において話し手が聞き手と視界を共有しないという特殊な場合のア系指示詞の使用は、文脈指示における回想調、独白調という特殊な場合におけるア系指示詞の使用に対応している。ここにおいて現場指示と文脈指示におけるア系指示詞の用法全般に矛盾がないといえる。

本稿は『日本語・日本語教育論集』(2004)という私家版とでもいふべき著書に発表した同名の論考に大幅な削除と幾分の加筆をほどこしたものである。私家版に近いその著書はほとんど入手不可能ともいふべきものなので、拙稿に対する日本語教育関係者、日本語研究者の御検討、御批判をおおぐ機会を得たいと考え、ここに再録に近い形で発表させていただいた次第である。

## 注

- 1) 指示詞という文法用語を「人代名詞」と区別して、日本語学に初めて持ち込んだのはおそらく佐久間 鼎 (1951) と思われるが、正保 勇 (1981) は「指示語」という名称は意味論的なものであり、構文的機能に基づいてなされるべき品詞分類にはなじまないと主張している。
- 2) 前田 (1993)、前田 (2003) において述べたが、現在、ソ系指示詞における現場指示と文脈指示の関係は、当時考えていたほど簡単ではないという認識にたっている。しかし、現場指示におけるソ系指示詞のもつ複雑な性質は、そのまま文脈指示においても反映されるので、その意味ではやはり現場指示、文脈指示の用法間に矛盾はないといえる。
- 3) 渡辺 (1952)、渡辺 (1996) に指示詞と感動詞の関係について興味深い分析がある。

- 4) 金水 (1999) はコ系列とア系列は直示用法が原型的な用法で、文脈照応と見られるものでも、直示的な世界を色濃く残しているとして、コ系とア系の非直示用法は直示用法の拡張であると述べている。庵 (2002) も細部の違いはあるにせよ、基本的には金水の捉え方と同じである。
- 5) 松下 (1924) ではコ・ソ・アの現場指示、文脈指示の区別はなされていない。なお、引用に際し漢字は現代表記に改めた。
- 6) 左近寺 祥子評、『悪について』(中島義道)、毎日新聞 (2005・3・20)

### 参考文献

- 庵 功雄 (2002) 「「この」と「その」の文脈指示的用法再考」『一橋大学留学生センター紀要』5。
- 加藤重広 (2001) 『日本語学のしくみ』研究社。
- 金水 敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6—4、言語処理学会。
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店。
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語 林 栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版。
- 佐久間 鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版、復刊 (1983)。
- 迫田久美子 (2004) 「指示詞コソアの正用と誤用」『月刊言語』11、大修館書店。
- 正保 勇 (1981) 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』大蔵省印刷局。
- 堤 良一 (2002) 「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』122。
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7。
- 堀口和吉 (1977) 「指示語「コ・ソ・ア」考」『論集日本文学・日本語5現代』角川書店 (1978) 所収。
- 前田昭彦 (1993) 「外国語教授法と初級日本語教育におけるその実践」『長崎大学外国人留学生指導センター年報』1号。
- 前田昭彦 (2003) 「日本人学生・留学生混成クラスでの日本語学講義」『長崎大学留学生センター紀要』11号。
- 松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』紀元社。
- 渡辺 実 (1952) 「指示語彙「こ・そ・あ」」『国語意味論』塙書房 (2002) 所



収。

渡辺 実 (1996) 『日本語概説』 岩波書店。

(留学生センター非常勤講師)